笑顔の扉 ④

―僧侶が幸せ指南

月の光のように仏の大悲が降り注いでいる

私たちの所では、雪解け間近、そろそろ春の萌しが、体中に感じられる頃、「春勧化」という、お参りが行われます。

私が住職をしております西勝寺の場合ですと、現在は2月22日から28日にかけての1週間、昼は本堂横のお部屋で、夜は門徒さんのお宅をお宿として、春の御勧化の場が持たれます。在所御座といっています。

20代から、毎年お参りしてきましたので、もう40年近く、その時期には御座宿に出かけ、「正信偈」をご唱和し、御消息拝読、毎晩2席のお説教・御法話をいただいて参りました。

27日の親鸞聖人のお逮夜(命日前日の夜)には、風温み、春が夜風にも忍び寄っていることが肌で感じられます。一日一日、日が伸びている。それを何よりも強く感じるのは、月明かりなのです。

熱心な真宗門徒であった金子みすゞさんが、「上の雪さむかろうなつめたい月がさしていて…」(「積もった雪」)とお詠みになったように、寒々とした白い月や吹雪の晩もありますが、それでもまちがいなく、月は柔らかく暖かみを増していきます。

何も持って帰れない兎

昔々、天竺(インド)に兎と狐と猿がいました。動物に生まれ、仏さまの教えを聞くことが出来ないのは、前世に生き物にやさしくせず、物を惜しんだためらしい。次の世は、なんとか人に生まれ、仏さまの教えに出会いたいものだ。

そうするには、年寄りを敬い、他の生き物とは兄弟のように仲良く暮らし、何事も他のために尽くすことが大切―。そうすれば人に生まれることが出来るそうだから、そのような生き方をしようと誓いました。

その時、たまたま、森にやつれたお年寄りがあらわれて、食べ物をくださいと言います。3匹の動物は、思いがけないチャンスに、張り切って食べ物を探しに出かけました。

猿は木に登って木の実を、狐はお堂のお供えものを持ってきました。ただ、兎だけは耳を高くし、目をまっ赤にして食べ物を探すのですが、人や獣から逃げるのに精いっぱいで、何も持って帰ることが出来ません。

話す人

真宗大谷派西勝寺(珠洲市)

住職 西山郷史

1947(昭和22)年珠洲市生まれ。静岡大卒、大谷大学修士課程(仏教文化)修了。珠洲市仏教会会長、坊守会・真宗講座講師のほか、加能民俗の会副会長、石川県埋蔵文化財センター評議員、日本宗教民俗学研究会委員などを務め、著書も多い。